

令和5年4月
一橋大学

令和5年度一橋大学一般選抜（前期日程）第2次試験

出題の意図等 【国語】

問題一

現代文の読解力を試す問題である。「抵抗」という振る舞いの意味を拡張し、優位な力に対するやむにやまれぬ反発と位置づけたうえで、哲学が抵抗にほかならないことを説く文章である。

問い一 内容を理解した上で語を的確に選択し、かつ漢字を正確に書く能力をみる。解答例は、A「既得」、B「惰性」、C「義憤」、D「規範」、E「遂行」。

問い二 主として次の段落で詳しく説明されているように、支配的な権力とはさまざまな強制や妥協を迫る優位な力であることを、一般化して短い字数でまとめられるかどうかを問う。

問い三 文章全体で説かれているように、抵抗はやむにやまれず自然に生ずる振る舞いであり、効果や結果から逆算して行うものではない。このことを的確に把握できているかどうかを問う。

問い四 途中までは「抵抗とは何か」という問題について具体例をふまえて論じていたが、最後の三段落でその議論が「哲学とは何か」という問題に接続されている。「哲学は抵抗である」とはどういうことかと、「その抵抗は知的なものである」とはどういうことかの二点を、的確に把握できているかどうかを問う。

問題二

いわゆる近代文語文は、近代の日本社会に深く関係しており、当時の知識人が新しい課題にどのように取り組んだかを知る上で重要である。そうした文章の読解力を試す問題である。この文章は、自然現象や人間の感情、言論などを例にとり、たとえ正反対の事態であっても、人為的にどちらかを抑制せずに、自然に交じり合ったり議論を交わしたりすることによって中庸に赴いていくことを示し、政府に批判的な結社や新聞雑誌の抑圧に強く異を唱えた文章である。

問い一 普段見慣れない用法の単語の意味を、前後の文脈から推測する力をみるものである。アは「自然にもつ性質」など、イは「後日」など、ウは「意見を述べる手段」など、エは「反対」などが適当である。

問い二 「抑強揚弱の平均力」がどういうことを指しているのかを簡単に説明できるかを問うものである。源平の盛衰に関して一般的に人が持つ、強者に反発することで弱者に思いを寄せる感情が生じ、バランスのとれた見方ができるということが説明できるかを問う。

問い三 全体の議論をふまえ、筆者の政府に対する主張を問うものである。相反する主張を自由に戦わせることでだんだんと中間点が見いだされていくものであり、この平均力を抑え込むとフランス革命のような大きな被害をもたらされることになるので、政府はむやみに言論を統制すべきではない、ということが規定の字数で過不足なく答えられるかを問う。

問題三

文章全体の論理を正確に読み取る読解力と、それを二〇〇字で要約する文章表現力を問うことを意図している。素材となる文章は、アイルランドにおいて言語の価値の序列化をきっかけに民族語から英語への言語交替が起こったことを論じ、その事例との比較から、日本の英語教育に関する議論に再考を促している。この文章の内容を二〇〇字の解答制限の中で要約するには、単に元の文章で論じられている順に要点を抜き出すだけでは不十分であり、全体の論旨を把握した上でそれらを再構成し、新たな文章として簡潔に表現する必要がある。